

たろうのふしぎなよる

天城町立天城小学校 二年

よしおか 吉岡

えいみ 瑛美

「うわあ、きれいな花。もってかえろう。」

たろうは、ハイキングのかえりみち。うつくしい花を手に、みどりのみちをぐんぐん下りた。天ぎだけには、カームイ、マチャラ、マムイという名前の三つのたきがある。とちゅう、アマミハナサキガエルやリュウキュウアオヘビに出会えることもある。たろうは、オキナワウラジロガシの林で、大きなねっこのそばにこしをおろしてひと休みするときはすきだ。

「ハイキングたのしかったね。また行こう。」

たろうは、かぞくにおやすみなさいを言ってるへやにむかった。気もちよくねていると、なんだかまぶしい。「もうあさかな。」とへんな気もちで目をあけると、山からもつてきた花をかざっているところに男の子がいる。たろうはびっくりして、

「きみはだれ。なにしているの、なんではだかなの。」と、こえをかけた。

「おれは、ケンムン。おまえがおれのともだちの花をぬいていったから、つれもどしにきたんだ。」

ケンムンは、おこっている。話を聞いたことはあったが、本とうにいるなんて。おどろいてるばあいじゃない。

「ごめん。きれいだったから、もってきたんだ。」

「花や生きものは山のたからものだ。みんな山で生きるいのちだ。もちかえったらいけないんだよ。だから、人げんはこまる。」

たろうは、わるいことをしたと気づいた。ごめんなさいの気もちでいっぱいになった。

「もうこんなことしないよ。ぼく、天ぎの生きものやしぜんが大すきなんだ。きみがすんでいるガジュマルの木もぎんちゃんもね。」

ケンムンのかおがやさしくなった。

「はっはっはあ。ぎんちゃんか。あいつら近づく、すぐおしっこかけるぞ。」

「オレンジ色のね。本とうは、オキナワイチモンジハムシっていう名前なんだって。きらきらしていて、きれいだね。」

ケンムンによると、ぎんちゃんは、ガジュマルの木がくしやみをしたときに生まれるそう。二人は生きものの話でもり上がった。たろうは、ずっと気になっていたことを話した。

「天ぎだけって、女の人がねているようだから、ねすがた山と言われているよね。とおくから、山を見ていた

とき、おながが大きくうごいているように見えたことがあつてさ。山がうごくはずないんだけどね。」

ケンムンは、また大わらいした。

「女の人だつて。ねすがたどんはおじさんだよ。会つてみたいかい。」

うなずいたしゅんかん、たろうはくらやみの中にいた。月にてらされて、大きな山がすわっている。ケンムンが言った。

「こちらが、ねすがたどん。ひるはねているが、よるはおきあがる。元気な山のかみさまだ。こちら、人げんのたろうくん。」

「天ぎの森は、おいしい水と空気でえいようたつぷりだから、まいばんごちそうで。」

と言って、ねすがた山はおなかをさすった。たろうは、山がしゃべっておどろいた。山のかみさたちは、むかし、まだ人げんがないじだい、じぶんのばしよをさがすため、日本をたびしていたらしい。ねすがた山は、ふじ山やさくらじまなど、なかよしの山とわかれた後、さらに南にむかった。まよなかについたこのばしよが、とくのしまだった。出むかえてくれた生きものたちと、すぐなかよくなり、みどりいっぱいのこのばしよに心をきめたそうだ。

「ねすがたさま、あそぼうよ。」

アマミノクロウサギとハブがさそっている。

「ようし、すべつていいぞ。」

山は、みんなをせなかにのせた。

「すべりだいだ。わあい。」

よるの山ではしゃいだあと、生きものたちが、

「山のかみさまがいてくれるので、ぼくたちは、あん心してくらせるのです。」

と、たろうに教えてくれた。ケンムンもうなずいていた。ねすがた山は、てれくさそうにわらった。

「ひるはねているが、たまに目をさますと、うつくしいエメラルドの海が見える。なみの音がザザーンとやさしくくりかえす。わしは、こんないいところにきてしあわせじゃ。」

ねすがた山が、もう一どわらうと、たろうはじぶんのへやのふとんの中にいた。

たろうは、「ゆめを見ていたんだ。」と思った。それでもいい。天ぎのしぜんがもつとすきになった。このしぜんをまもう。また、みんなに会いたいな。たろうはぐっすりねむった。花びんの花がきえていることに気づかずに。